



ジョージア(グルジア)便り その69

Vol.87

トビリシの退廃美

文 高野 陽年

text by Yonen Takano



トビリシの空港に降り立ち街へと向かうとまず目につくのはブルータルで粗野なコンクリートむき出しの建物や崩れかけのクラシックな洋館。そしてソ連時代から脱却できない無機質な街並みである。それぞればらばらに独立しているように見えて雑多な印象を受ける。

それでもちろんトビリシにもモダン建築のランドマーク的建物はいくつも存在する。しかしそれらがトビリシの街並みを体裁よくしているかといえば、まったくもって違っていて、むしろトビリシの無秩序の外観に一層拍車をかけているようにも思える。

だが果たして本当にトビリシは無秩序に異なる時代背景やスタイルが乱立している街なのだろうか。ぼくは街を通して退廃的秩序という見えない雰囲気や街を統一していると思っている。そこにこそこの街の魅力があるのだと。

仮にトビリシにバルセロナやパリのような整った外観の街並みがあってもそれはただの違和感でしかないだろう。観光客はそんな場所には目もくれず、荒れ果てた廃墟や塗装やレンガがはが

れ落ちた19世紀の建物のほうがよっぽど気に入るはずだ。

実はトビリシには独自の形式と雰囲気が存在するのだ。僕はそれをソビエト・レジムからの停滞とポストワーだと思っている。普通日本という戦後は第二次世界大戦後を指すだろうがジョージアの戦後は92年の内戦と08年のロシアとの戦争後のことであるからまだまだ戦後を引きずっているのである。

こういふいかにも負のイメージを持たれがちであるが、この退廃的秩序は優れた芸術を生み出す土壌をつくり出しているのも事実である。例えば今回僕のバレエ作品の衣装を手掛け、パリなどでも活動し、最近では日本でも人気の高まっているジョージアのファッションブランドであるシチュエーションニストは顕著な存在である。彼らが作る服はどこかソ連の香りがするが嫌味なく、無骨なように見えて実は洗練されている。人が着る服といった想定ではなく、ポストワーという形式を服に落とし込み、時代が服を着ているのである。彼らの服はシャンゼリ

ゼ通りよりも、五番街よりも、廃工場を着たほうがかつこよく見えるだろう。

日本人は無常観を尊ぶ民族であるからトビリシやシチュエーションニストもつ退廃美にどこか惹かれるものは多いだろう。僕もそのうちの一人であるがひとつ危惧していることがある。仮にトビリシが急速に発展し、ソビエトそして戦後から脱却し、シチュエーションニストが欧米のトレンドの波に飲み込まれてしまったらもはや退廃的ではなくなり、街も服も面白みがうせてしまうだろう。トビリシの美しさと社会の豊かさは諸刃の剣なのかもしれない。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノババレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。